

キャサリン・アン・ポーターと ヘンリー・ジェイムズ

武田千枝子

アメリカの南部文芸復興運動の中核に位置する作家たち Katherine Anne Porter, William Faulkner, Robert Penn Warren そして Caroline Gordon らは「極めて芸術家意識の高い作家」⁽¹⁾であると言われ、その中には Henry James の影響を受けている作家も少なくない。とりわけポーターにはその傾向が色濃く見られる。Darlene Harbour Unrue は、「ポーターに影響を与えた作家は、ほかのどの一人の作家よりもヘンリー・ジェイムズであった。」とまで言い切っている。⁽²⁾

ポーターは評論や会見記において、機会あるごとに、文学の師の一人としてジェイムズの名を必ず挙げてきた。1950年のエッセイ“‘It Is Hard to Stand in the Middle’”の中で、何年も前、メキシコに滞在していた頃、Hart Crane と共に Ezra Pound を読んでいた時、この詩人から受けた恩恵の大きさを改めて認識したことを語った後で次のように記している。

... it [that there is nobody like Ezra Pound] is still the truth for many of us who came up, were educated, you might say, in contemporary literature, not at schools at all but by five writers: Henry James, James Joyce, W. B. Yeats, T. S. Eliot, and Ezra Pound. The beginning artist is educated by whoever helps him to learn how to work his own vein, who helps him to fix his standards, and who gives him courage. I

believe I can speak for a whole generation of writers who acknowledge that these five men were in just this way, the great educators of their time. (CE, 40)⁽³⁾

ジェームズを「偉大な教師」の一人として数えているこの記述は、単に個人の好みから出たものではなく、文学を志す人びとにとって彼(ら)の存在がいかに大きなものであるかを確信をもって語るものである。会見記においても文学の師としてのジェームズを語るポーターの姿勢に変化はない。彼女に近代文学への手ほどきをしてくれた⁽⁴⁾ジェームズと Thomas Hardy の名前は共に “the giants of our age” である作家たちの先頭に据えられている。⁽⁵⁾ポーターにとってジェームズは、Homer, Dante, Chaucer そして Shakespeare と共に文学の基礎を教授してくれた “literary heroes” の一人であった。⁽⁶⁾

ジェームズに対するポーターの傾倒ぶりは更に進んで個人的な感情が強く滲み出た記述となって現われてくる。1961年にJames Ruoffと行なった対談の中で彼女はこう語っている。“Through the years. . . I've had greater sympathy for Henry James than for almost any other writer.”⁽⁷⁾この作家に対する共感、彼女自身が筆をとったヘンリー・ジェームズとその家族についての評伝 “The Days Before”(1943)⁽⁸⁾から窺うことができる。アメリカにおける異邦人としての一家を語る時、おそらくポーターは、一人、故郷を離れて異郷、異国で生活した自分自身の姿を重ね合わせていたと思われる。小説家ヘンリーの本質を見抜いて “His intuitions were very keen and pure from the beginning. . .” と言い、また子供たちに “spiritual decency” と “a sensuous education’ ” を身につけさせたいと願った父親は

taught them a horror of piggishness, and of conscious virtue; guarded them. . . from that vulgarity he described as “flagrant morality” ; and quite preached. . . against success in its tangible popular meaning. (CE,

243)

と述べている。抑制のきいた潔癖な祖母の許で成長したポーターが、行為の中に高い精神性を求めた Henr James, Sr. の教育方針に共感を抱いて筆を進めている様子が伝わってくる。またジェイムズの小説技法について触れた箇所である次の引用

Through his extreme sense of the appearance of things, manners, dress, social customs, the lightest gesture, he could convey mysterious but deep impressions of individual character. (CE, 245)

これは一見、何気ない外面描写かと思われる細部の積み重ねを通してキャラクターの本質を浮かび上がらせ、作品の意味の広がりと深まりを生み出していくポーター自身の方法を語っているのではないかと思わせるほどである。ジェイムズの言葉⁹⁾を引用しながらの “The Days Before” の結びはジェイムズ文学の本質を射抜いている。

... no man has ever seen any relations concluded. Maybe that is why art is so endlessly satisfactory : the artist can choose his relations, and “draw, by a geometry of his own, the circle within which they shall happily *appear* to do so.” (CE, 248)

尽きることのない関係　人與人，事物と事物，人と事物の尽きることのない関係を描くこと　両者の芸術に対する姿勢が正鵠を射て表現されている。

ポーターのジェイムズへの傾倒ぶりはかなり強烈である。彼女自身が残した資料が姿を見せるにつれて、それは一般に理解されている以上のものであることが明らかとなる。その刊行が長らく待たれていた書簡集

キャサリン・アン・ポーターとヘンリー・ジェイムズ(武田)

Isabel Bayley 編 *Letters of Katherine Anne Porter* (New York : The Atlantic Monthly Pr. , 1990)に収録されているジェイムズに言及した数通の書簡もこのことを裏付けてくれる。特にその中の、甥 Paul Porter に宛てた 1943 年 3 月 31 日付の書簡にはジェイムズへの思いが次のように綴られている。

My devotion to him grows as I study his life, the most admirable life I know, lived as it was in the mind, the imagination, the heart, and the most unwavering fidelity to his own knowledge and convictions. . . [sic] With no support, almost no encouragement or understanding from anybody, he just went on being an artist from his cradle to his grave, and the record is so honorable I wish every writer in the world could know of it. But people go on writing the same old clichés about the man. I am going to do my little bit towards breaking up that rubber stamp. . . [sic] (LKAP, 261-262)

ここに述べられているように、“The Days Before” を書き進むにつれて、ポーターのジェイムズに対する思いは一層、強くなっていった。そしてここには、小説家ジェイムズの芸術的信条や方法に対する共感よりも、一人の芸術家としてジェイムズが実際に生きた生涯に対する、その「見事な」生涯に対する深い共感と、同時にポーターの共感を背後で支えている小説家ジェイムズに対する世間一般の誤解に対する憤りが示されている。以前、資料が十分公開されていなかった頃、ポーターは自分自身および個人的な感情を語ることが少ない作家であると思われていただけに、この率直な感情の吐露は目を見張らせるものがある。1940年代に至ってやっと再評価の始まったジェイムズに対する世間の不当な仕打ちを正そうとするポーターの情熱は、この作家に対する共感に支えられた深い理解⁽¹⁰⁾から生まれている。(不正を許さぬポーターの潔癖な気質によるものであることは言うまでもないが。)

ウンルーはポーターがはじめてジェイムズの作品を読んだのがいつのことであるかはわからないとしながらも、1920年代から年を追うごとにジェイムズとの結びつきが強くなっていくことを確認している(17)。⁽¹¹⁾ヘンリーおよびジェイムズ一家の伝記の余白に残されているポーターの書き込みは、恰も彼女自身、家族の一員であるかのように彼らと一体になっていると言う(20)。そしてこの両者の関係が稀にみるものとなっているのは、その関係が“her conscious and subconscious mind”を映し出しているからであると述べている(17)。

ポーターは1939年に「アメリカ文学の現状」に関するいくつかの質問を受けた際に、ジェイムズとホイットマンのどちらがアメリカ文学の現在および未来によりかわりを持つか、と問われて、「宇宙に向って無差別に拡張し続ける」ホイットマンに対して、「鍛え抜かれた、意識の高い芸術家・真摯な名手」としてのヘンリー・ジェイムズを選んで次のように述べている。

James, I believe, was the better workman, the more advanced craftsman, a better thinker, a man with a heavier load to carry than Whitman, His feelings are deeper and more complex than Whitman's; he had more confusing choices to make, he faced and labored over harder problems.
(CE, 452)

ジェイムズは作家としての技倆の面でホイットマンを凌ぐばかりでなく、人生を歩む過程でより厄介な選択を迫られることが多かったとの理解を示し、ホイットマンの「自己愛」を「人類あるいは労働者階級あるいは神に対する愛に偽装した」「悪徳」であると断じている(CE, 452)。ジェイムズが自分自身の問題として直面し、また作家として関心をもって取り上げた、のっぴきならぬ状況における、人生の質を変えることになる選択の問題は、ポーター自身が若い頃から体験し、作品化してきた危機的場面で遭

遇した問題である。その意味では、二人の作家はその体験の同質性において結ばれていると言うことができる。

ジェームズとポーターはともに女性を描いて他を圧倒している。ポーターの作品に登場する女性は南部社会の制約のもとで生きることを余儀なくされている。過去の南部に生まれた Sophia Jane Rhea, その娘 Ellen, 孫の Miranda と彼女の姉妹ともいべき女性たち, さらに白人女性の陰で生涯を送る黒人女性がそれである。これらの女性については、フェミニズムの視点で考えることを迫ってくる箇所もあることは確かである。たとえば“The Journey”で描かれている、無計画で無責任な夫にただ黙々と従って耐え抜くソファリアの生涯や、女の子にふさわしい振舞いや服装をミランダに要求する地域社会や家族。しかしポーターが描く女性たちには、そのような制約に押し潰され、作り変えられていく人物はいない。そこには、性別や因襲を超えて、一個の人間として周囲の世界と対決しようとする強い意志の働きが認められる。「旅路」における黒人娘 Nannie にしても誕生日すら正確にはわからぬ品物同然の存在でありながら、ソファリアの影として生涯を共にし、ソファリア亡き後は、長年包み隠してきた独立の意志を実現させ、時代と社会制度の単なる犠牲者ではないことを示すのである。ナニーは黒人女性でありながら白人女性ソファリアと相似の機能を付与されている。ポーターにおいては、フェミニズムの視点を超える、人間存在そのものに目を凝らし、これをいかに描き出すかという芸術家の視点こそ重要なものなのである。ポーターのこのような姿勢に関連してウンルーの興味深い指摘がある。ウンルーは、ヘンリーの母メアリーと妹アリスに対するポーターの見方はフェミニズムに根ざしたものだと言う(19)。メアリーを母親の理想像とするポーターは女性に対して高圧的なジェームズ家の男性に反撥を示す。それにも拘らず、ポーターが最終的に心を傾けたのは一家の男性の一人ヘンリーであったことをウンルーは重視して、これは“Porter the artist”が意識的に“Porter the woman”を超えたことであるとみなしている(20)。

ポーターの作品にみられるジェイムズの影響についてはすでに多くの指摘がなされている。⁽¹²⁾ここではポーターが最も関心を抱いたジェイムズの人生とのかかわり方という面から二人の作品をみてみたい。

ジェイムズの作品のヒロインにみられる特質は、『ある婦人の肖像』の構想の礎石となった「運命に立ち向っていく」女性の姿勢である。イザベルが最終的に選択する「一本の真直ぐな道」(a very straight path)は前後左右に揺れることを許さない厳しく堅い決意を示している。不治の病によって限られた生を生きることを運命づけられた『鳩の翼』のミリーがスイスのアルプス山中で絶壁の突端に腰を下ろしている姿は、極めて危うい状況の中で毅然と己れの運命に立ち向う意志そのものの視覚化である。

ポーターの一連のミランダ物語の最後を飾る“Pale Horse, Pale Rider”の結末は、生死の境をさ迷った後に重いインフルエンザから回復して退院の準備をするミランダを描いている。病室の外には第一次大戦終結後の、しかし荒涼とした風景がひろがっている。その中でミランダは、家族から離れて、恋人もこの同じ病に奪われてただ一人、外の世界へ足を踏み出そうとしている。彼女がそのために取り揃えようとしている品々は“one pair of gray suède gauntlets without straps, two pairs gray sheer stockings without clocks” (CS, 316)⁽¹³⁾である。それには余分な飾りとなるもの 革紐や飾り刺しゅうがない。彼女が立ち向かおうとしている外界はどうか。最後のパラグラフには次のように述べられている。

No more war, no more plague, only the dazed silence that follows the ceasing of the heavy guns; noiseless houses with the shades drawn, empty streets, the dead cold light of tomorrow. Now there would be time for everything. (CS, 317)

そこには個人の存在を脅かす戦争や疫病がない代わりに空虚な静寂があるだけである。明日を照らす筈の光はあるが、それも生気のない冷たい光であ

る。それにも拘らず何かを試してみる時間だけはあると予想する。装飾をそぎ落した長手袋 (gauntlets) をもって、再び燃え立った生命の炎と強靱な意志の力だけによって明日に挑むことをミランダは心に決めているのである。空虚な不毛の世界の暗く重苦しい空気と対照的に、最後の一文には明るく軽やかな響きさえ感じられるが、それはすべてを失ったミランダに唯一つ残された明日への挑戦の姿勢によるのである。

“Flowering Judas” の Laura や “Theft” の ‘she’ は周囲の世界から超然とした生き方を続けた結果、自分の手には何も残らない不毛の空間を生み出してしまふ。“Holiday” の語り手「私」は何か解決できない悩みを抱えた女性である。この女性は春浅いテキサスの、ドイツ系移民の農家 Müller 家で休暇を過ごすことになり、一家の人びとと共に暮らしながら彼らを擁護し、彼らと交流することによって、自分の悩みから逃れようとしていた誤りに気付くのである。この語り手はローラや ‘she’ と同様、これまで他人に対して親身に接触したことがない。しかし、母親の死に直面して身悶えして苦しんでいるとみえたミュラー家の障害者である長女 Ottilie と二人、馬車で葬列を追って行く途中、オティーリアは突然、笑い出す。彼女は戸外の自然に溶け込み、自然な姿に戻ることができたのである。はじめて他者に対して力になれたと思った時、語り手はそれが自分の思い違いであったことを知る。他人の苦しみを肩代りすることはできない。それは自分で背負っていかなければならないものだということを知るのである。このことは作中の小さなシーンにおいても繰り返されている。この家の娘 Hatsy が母親から牛の乳しぼりを命ぜられると新婚の夫が手を貸そうとする。すかさず母親の「駄目！」という叫びが飛んでくる。身体が不自由なオティーリアも、来る日も来る日もこの大家族の食事の支度を黙々と一人でこなしている。重荷は人それぞれであるが、この家では定められた荷は一人で負わなければならないという暗黙の掟が厳然として存在しているのである。誰もオティーリアをかばったり手を貸したりはしない。自分の重荷を逃れて、周囲から超然としていては得るものはないのである。

“Holiday”の語り手の発見は、人は毅然たる態度で己れの運命に立ち向わなければならない、というポーターの認識を裏面から照らし出したものである。ポーターはいわば、ジェームズの変奏曲を奏でる技倆の確かな演奏家である。ジェームズの主題と技法を独自の扱い方で処理することにより小説の可能性を拡大した作家であると言えるのではないだろうか。

注

- (1) John M. Bradbury, *Renaissance in the South* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Pr., 1963), p. 15.
- (2) Darlene Harbour Unrue, “Katherine Anne Porter and Henry James: A Study in Influence,” *Southern Quarterly* 31 (Spring 1993), 17. (筆者未見の資料に関することも含めて、この論文はポーターとジェームズの関係について多くの有益な情報を提供してくれている。)
- (3) *The Collected Essays and Occasional Writings of Katherine Anne Porter* (New York: Delacorte Pr., 1970)からの引用であることを示す。以後、これにならう。
- (4) Barbara Thompson, “An Interview with Katherine Anne Porter (1963),” *Katherine Anne Porter: Conversations*, ed. Joan Givner (Jackson: Univ. Pr. of Mississippi, 1987), p. 80.
- (5) Roy Newquist, “An Interview with Katherine Anne Porter (1965),” *KAP: Conversations*, p. 104.
- (6) *Ibid.*, p. 106.
- (7) *Ibid.*, p. 63.
- (8) ウンルー（注②参照）によれば、1940年代にポーターがカリフォルニアに住んで映画の台本書きやスタンフォード大学で講義をしていた頃、F. O. Matthiessen と出会ってジェームズ伝を書いたという（17頁）。マシーセンは1944年に *Henry James: The Major Phase* を、47年に *The James Family* を出版しているので、両者がジェームズについて話し合ったことは十分考えられるが、現在、出版されている伝記、会見記また書簡類からはそのことを裏付ける資料は見出せない。
- (9) Henry James, “Preface to *Roderick Hudson*,” *The Art of the Novel*, with an Introduction by Richard P. Blackmur (New York: Charles Scribner’s Sons, 1934), p. 5.
- (10) ウンルーはポーター自らが寄贈先として選んだ Maryland 大学図書館に収められたポーター所蔵のジェームズ関係の書物の余白に書き込まれたコメントを紹介しながら “how carefully she read James and how well she understood his prose” と述べている。(Unrue, *op. cit.*, p. 20.) (以後、本文中に引いたこのエッセイからの引用と言及

キャサリン・アン・ポーターとヘンリー・ジェイムズ(武田)

は文尾に頁数のみを記す。)

- (11) ポーターの最初の短編集 *Flowering Judas and Other Stories* (1930)にはジェイムズ風といわれる“Magic”(1928)が収録されていることから、ジェイムズの影響は早い時期からあったと考えられる。
- (12) ポーターの“The Jilting of Granny Weatherall”におけるジェイムズの“The Beast in the Jungle”の影響(Willene Hendrick and George Hendrick, *KAP*, rev. ed. (Boston: Twayne Publishers, 1988), pp. 71-72.), “The Circus”における“The Jolly Corner”や“The Last of the Valerii”の、あるいは *Ship of Fools* におけるジェイムズのかなりの影響(Unrue, *Truth and Vision in KAP's Fiction* (Athens: Univ. of Georgia Pr., 1985), p. 30.)が指摘されている。また文体の面でもウンルーは“Daisy Miller”の冒頭のパラグラフと *Ship of Fools* のそれとの類似を指摘する(22 - 24)。
- (13) *The Collected Stories of Katherine Anne Porter* (New York: Harcourt, Brace and World, 1968)からの引用であることを示す。以後、これにならう。

(英米文学科 教授)